



Title	藤原妍子周辺の女房と『源氏物語』：哀傷歌を通して
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	詞林. 2017, 61, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60676">https://doi.org/10.18910/60676</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 藤原妍子周辺の女房と『源氏物語』

— 哀傷歌を通して —

瓦井 裕子

一、はじめに

万寿四（一〇二七）年九月十四日、三条帝中宮藤原妍子が崩御した。三十四歳の若さであった。『栄花物語』は、道長・倫子夫妻の激しい悲痛にはじまり、遺された人々の悲しみをかなりの筆を割いて語ってゆく。折にふれての哀傷歌も多く載る。その数は十四首と『栄花物語』中では突出して多く、妍子周辺の女房が折にふれて彼女を哀惜する詠が目立つ。また、撰集や家集にも妍子への哀傷歌は比較的よく残っており、十一世紀前半の哀傷歌を考える上での資料として注目される。妍子といえ、『紫式部日記』に見える次の一齣でもよく知られる。

局に、物語の本どもとりやりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿に、奉りたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞ

とりはべりけむかし。<sup>②</sup>

(168)

紫式部が彰子の御前に伺候しているとき、道長が彼女の局に入って下書きの本を持ち出し、「内侍の督の殿」、妍子に与えてしまったという。そのようにして手に入れた本の贈与先として妍子を選ばれたことは、妍子自身が『源氏物語』の愛読者であったことを示しているように、妍子と『源氏物語』との関係は従来あまり問題にされてこなかった。彰子と妍子は仲の良い姉妹であつたらしく、折にふれた贈答歌も残り、いわゆる彰子サロンと妍子サロンの近似性も指摘されている。<sup>③</sup>

このような状況を考えると、妍子周辺における『源氏物語』の受容を辿ることは、同時代的な『源氏物語』受容を解き明かす重要な手がかりになる。本稿では妍子への哀傷歌を手がかりとして、そこで行われた『源氏物語』撰取（以下、源氏撰取）を紐解き、妍子周辺における源氏撰取の様相とその特殊性を明らかにしていきたい。

## 二、『栄花物語』と女房たちの哀悼

妍子は正暦五（九九四）年に道長と倫子の間に生まれた。

寛弘七（一〇一〇）年に春宮時代の三条帝に入内し、長和二（一〇一三）年に禎子内親王を産む。

妍子は華美を好んだようで、贅を尽くした一品経供養を行ったことや、女房たちの衣装の豪華によって道長や頼通に叱責されたことが伝わる。女房もまた同様の嗜好を持った者たちが多く伺候していたことが『栄花物語』や『無名草子』に伝えられる。

その御妹の枇杷殿の皇太后宮と聞こえさするにこそ、いと華やかに、もの好みしたる人々多くさぶらひけれ。大和宣旨もその宮の女房なるべし。折々の女房の装束、打出なども、ためしなきほどに制を破り、女房の一品経供養などしけることも、いとおびたたくはべりけれ。

（『無名草子』・281）

また、妍子のもとには相模や大和宣旨、娘・禎子内親王の乳母として弁乳母など歌才ゆたかな女房たちも出仕していた。

妍子は万寿四年の三月ごろから病に苦しみ、九月十四日に崩御した。九月十六日に葬送、十月十九日には三十五日の法要が行われ、翌日、禎子内親王の乳母である命婦乳母と弁乳母が歌を贈答したことが『栄花物語』に見える。『栄花物語』には、続いて「十六日」に葬送の夜と同じ月を眺めて妍子周

辺の女房たちが歌を詠み交わした記事が載る。

昨日（稿者注・三十五日の法要）の講師、天竺の釈迦の涅槃の所の悲しみの涙の、今にそのあたりの砂子にしみて紅の色なる心を説きければ、命婦の乳母の、里より、

君恋ふる涙の色はそのかみの別れの庭もかくやありけん

返し、弁の乳母、

いにしへの別れの庭の涙にも身にしむことはなほぞまされる

ことども多かれど、え書きつづけず。十六日の月明きに、典侍、

君が見し月ぞと思へどなくさまず別れし庭を憂しと思へば

弁の乳母、

ながめけん月の光をしるべにて闇をも照らす影と添ふらん

中将の乳母、

立ちのぼる雲となりにし君ゆゑに月ぞうき世の影とのみ見る

五節の君、

憂けれども見し面影の恋しさに今宵の月をあかず見ることかな

などて君雲隠れけんかくばかりのどかにすめる月も

ある世に

少將、

さやかなる月とはいさや見えわかずただかき曇る心地のみして

（『榮花物語』巻第二十九 たまのかざり・③・141～143）

三十五日の法要で、講師は釈迦涅槃のとき人々の慟哭の血涙によってあたりが紅に染まったことを説いた。命婦乳母と弁乳母は、その昔の涅槃の悲しみと比べても、いま妍子を亡くした悲しみは勝るとも劣らないとする。そのとき、彼女たちは涅槃とその悲痛の場を「そのかみの別れの庭」「いにしへの別れの庭」と表現した。

続く「十六日」の記事は、何月の十六日であるか判然としない。『新全集』は、

本記事は三十五日の法事（十月十九日）と四十九日の法事（十月二十八日）との間に位置するから、十月の十六日であろう。ただし、時間的先後関係に従って位置づけるならば、本記事は三十五日の法事の直前に来る。

と、これを十月十六日の記事であるとすると、確たることは言いがたい。この記事がここに置かれた理由は、加藤静子氏が、

釈迦入滅の「別れの庭」という言葉で、妍子との死別が釈迦のそれに並べられ、「十六日の月」を詠みこんだ以下の歌群とは、典侍の「別れし庭」の歌ことばで結びつ

けられる<sup>5)</sup>。

と指摘される通りであろう。

さて、最初の贈答で詠まれた「別れの庭」は、従来これが直接的に指す釈迦涅槃のこととしか考えられてこなかった。

しかし、「十六日」の記事が先行するならば、命婦乳母と弁乳母の「別れの庭」は、法要での説法に先だつてまつたく異なる文脈で詠まれた典侍の「別れし庭」を受けたことになる。仮に「十六日」が時間的に後ろに位置していても、典侍の「別れし庭」は妍子との別れしか意味しておらず、釈迦涅槃の要素はきわめて薄い。この二度の詠歌で詠みこまれた「別れの庭」「別れし庭」は、法要での説教内容に基づいた表現という従来の理解とは別の文脈を考えるべきではないか。

「別れの庭」「別れし庭」というのは、そもそも歌ことばとしてきわめて珍しく、妍子の崩御以前には一例しか確認されない<sup>6)</sup>。それが『源氏物語』であった。紫上を喪つてもうすぐ一周忌がめぐりこようとするとする七夕の翌朝、源氏は一人で過ぐす七夕に孤独を思う。

七月七日も、例にvariしたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星逢ひ見る人もなし。まだ夜深う、一とこり起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見たさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞ

おきそふ<sup>(7)</sup>

(幻・④・543)

七夕後朝の二星の悲しみを、源氏は紫上に先立たれた自身の心情に重ねる。「わかれの庭」は「逢ふ瀬」との対比として、最愛の人と別れた悲傷を示すものであった。妍子をめぐる哀傷歌に見える「別れの庭」「別れし庭」もまた、直接的には説教の内容を指すにしても、その表現の基底には『源氏物語』、そして紫上を亡くした源氏の悲しみを、わが悲しみに重ねあわせようとする意識が動いていたと考えられる。

さらに、次に再掲した命婦乳母の歌にも源氏撰取が想定される。

などで君雲隠れけんかくばかりのどかにすめる月もある世に

命婦乳母は、「このような美しい月があるのに、なぜあなたは雲に隠れてしまったのか」と妍子を雲に隠された月によそえる。雲隠れの月を人の死の比喩とするのは『源氏物語』が拓いた発想であった。

御墓は、道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立深く心すごし。帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

なきかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる

(須磨・②・182)

須磨退去を目前に、源氏が桐壺院の御陵に詣でる場面である。

命婦乳母も、月の雲隠れを死の比喩とする『源氏物語』の影響を直接的に受けていると考えられる。また、『後拾遺和歌集』ではこの歌の初句が「なごてかく」となっている。これは『伊勢物語』と『源氏物語』にしか見えないことばであることにも一応注意しておく必要がある<sup>(8)</sup>。

また、弁乳母の歌(再掲)、

いにしへの別れの庭の涙にも身にしむことはなほぞまされる

この意外に例が少ない表現で詠まれた結句にも、『源氏物語』宿木巻の薫と中君の贈答が響いている可能性がある。

折りたまへる花を、扇にうち置きて見あたまへるに、やうやう赤みもて行くもなかなか色のあはひをかく見ゆれば、やをらさし入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔の花

ことさらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよとをかく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

何にかかれる」といと忍びて言もつづかず、つつましげに言ひ消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、まづぞ悲しき。(宿木・⑤・394-395)

薫は露をおいた朝顔によせて中君への執着を詠むが、中君は朝顔（大君）に先立たれた露の身のはかなさを嘆く。このことばも『源氏物語』にしか確認できない。そして特徴的なことばではないため積極的に撰取とは認めがたいが、有名な場面であるため、この表現が脳裏によぎった可能性もあろう。

このように、崩御した妍子を偲んで周辺の女房が歌を詠んでいくとき、その詠には『源氏物語』の影響が顕著である。

哀傷歌は源氏撰取の重要な場でありつづけ、すでに当時としても珍しいことではなかった。『栄花物語』も『源氏物語』を意識し、たとえば後の後朱雀帝女御・藤原嬉子の崩御記事は、その構成の大枠を『源氏物語』の葵上の死の描写によっていることが指摘されている。妍子崩御記事に『源氏物語』との関係は見出されてこなかったようだが、加藤氏の言われるように「別れの庭」「別れし庭」ということばを媒介として二場面を一続きに配置する構成には、妍子周辺の女房たちの歌の背景から哀傷の心に源氏の心境を重ねようとした意識を読み取り、これを関連づけて配置しようとした『栄花物語』の意図が窺える。彼女たちは、紫上や桐壺院への哀傷歌を自由に撰取しながら、『源氏物語』が描いた哀惜の心を表出しようとしたのである。

### 三、『相模集』と源氏撰取の趣向

相模は結婚前の若いころ妍子に仕えたかとされ、『相模集』

にも妍子崩御に際した歌がまとまって載る。崩御当時の相模は夫・大江公資の任国に下向した後すでに離婚しており、妍子に出仕した頃から時間が経ってはいるが、往時をなつかしむ心もあつたと思われる。

皇太后宮亡せさせ給て又の夜、月のいみじう明き  
を見て

91 天のした雲のどかにもあらぬ夜に澄みても見ゆる秋の  
月かな

大谷に出で給しに、御送りの車などの打つ、きた  
りしが、いみじくあはれにて

92 あはれきみ雲のよそにも大谷の煙とならむ影とやは見し  
そのころ彼の宮の宣旨のもとに

93 間はゞやと思やるだに露けきいかにぞ君が袖は朽ち  
ぬや

返し

94 涙河流る、水脈と知らねばや袖ばかりをば君が問ふらむ  
十月になりて同宮の人の中に、誰がともなくてさ  
し置かせし

95 神無月しぐる、ころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人  
返したづねてをこせたり

96 言の葉を見るにつけても神無月いとゞ時雨ぞ降りまさ  
りける

（相模集） I・91～96 番歌

九一・九二番歌は独詠、九三・九四番歌は妍子女房である大

和宣旨との葬送直後の贈答、九五・九六番歌は妍子女房との名を明かさぬ贈答である。いづれの贈答も、相模から妍子女房へ詠みかけている。主人を若くして亡くした女房たちを思いやるのに加え、ひとりでは持てあます哀惜の情を共有しようとしたのであろう。

まず、九三番歌に注目したい。

問は、やと思やるだに露けきにいかにぞ君が袖は朽ぬや

相模は「弔問の私の袖さえ露で濡れたようなのに、ましてあなたの袖は涙で朽ちたようになっていよう」と詠む。自分の涙を「露けき」と表現し、さらに相手の袖はどれほど濡れているか、と思いやるこの歌は、次の六条御息所の弔問歌を踏まえたものであるらしい。

深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、とならぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。いまめかしうも、とて見たまへば、御息所の御手なり。「聞こえぬほどは思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。

(葵・②・51)

袖を「露けき」と詠んで、上の句と下の句の程度を比べようとする表現は、少ないながらも『蜻蛉日記』や『大斎院前の御集』などに見え、当時の女性たちに好まれた表現と思しい。六条御息所の弔問歌もこの好尚の中から生まれたものであろう。一方、相模歌を考えるならば、その歌ことばは好尚から直接発されたというよりも、相模の源氏撰取への嗜好を勘案して、『源氏物語』からの影響を読み取るべきであろう。御息所の弔問は「深き秋のあはれ」とあることから九月のことと思われ、九三番歌の贈答が踏まえるには時期としてもよく合致する。九月、自分よりも故人との関係の深い人物を弔問するとき、相模は六条御息所の弔問歌を踏まえ、源氏が悲しみに沈む晩秋の美しい情景までも取りこみつつ詠歌した。相手方は先に見たような源氏撰取を自在に行う妍子女房であるから、自歌の源氏撰取の趣向が理解されるといふ予想もあつたのであろう。

そう考えてくると、九五・九六番歌の贈答の、

十月になりて同宮の人の中に、誰がともなくてさし置かせし

という状況も、この六条御息所弔問の場面と無関係とは思われない。六条御息所は、葵上の喪に服す源氏のもとに文を送るが、名を伏せ「さし置きて」使者を帰らせた。そのひそやかな行為や文の様子によって源氏は「いまめかしうも」と心を動かす。相模が「誰がともなくてさし置かせし」というよ



うに、名を明かさず文をそつと置いてくるだけに留めたのも、やはり六条御息所の趣向を踏まえたものではなかったか。

こうしてやりとりされた九五・九六番歌の贈答もまた、源氏撰取が顕著である。妍子が崩御した九月から月が変わり、十月になった。

十月になりて同宮の人の中に、誰がともなくてさし置かせし

神無月しぐる、ころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人  
返したづねてをこせたり

言の葉を見るにつけても神無月いと、時雨ぞ降りまさりける

相模が「十月になって時雨の降るころはどのように過ごしていますか、遺されたあなたがたは」と問うと、筆跡から相模と分かったのだらうか、返歌が届いた。そこには、「弔問の便りを見るにつけても、十月の時雨のように涙がいつそう流れます」とあった。

この贈答はそれぞれ一首では源氏撰取歌と認定しがたい。しかし、両者を併せて見ると、次の葵上哀傷の場面を踏まえていることが理解される。十月、しぐるる空をながめながら源氏と頭中将が歌を詠み交わす場面である。

時雨うちしてもあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。君は、西のつま

の高欄におしかかりて霜枯れの前裁見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて頬杖つきたまへる御さま、女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかすと、色めかしき心地にうちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ

行く方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ  
(葵・②・54〜55)

相模は源氏の「しぐるる空」という歌ことばを用い、亡き葵上を偲ぶ源氏の心情を自歌で踏まえようとした。その手紙を受け取った妍子の女房は、相模歌が当該場面の源氏歌を踏まえることを理解し、源氏への返歌として詠まれた頭中将の歌から「いとど時雨に」という歌ことばをとって相模への返歌とした。相模の贈歌における源氏撰取、それが源氏撰取だという妍子女房の察知、そして『源氏物語』における返歌をさ



らに撰取しながら詠まれる妍子女房の返歌、という連鎖的な源氏撰取が行われているのである。

さらに相模の贈歌は、崩御直前に妍子周辺で詠まれた歌をも踏まえている。崩御のおそらく一ヶ月ほど前、妍子の御前に前栽が植えられ歌が詠まれた。弁乳母の歌が残る。

宮の御前に、前栽植えて人々歌詠みけるに

庭もせにうへたる花は君が代を野辺とぞみゆる秋の宮人

〔弁乳母集〕・14

妍子の病状はいよいよ深刻な状態であったが、回復への願いも込めて「君が代をのべ」と詠み、中宮（秋宮）であった妍子の女房たちを「秋の宮人」と表現する。このことばを用いて、相模は結局むなしくなってしまう妍子の女房たちを思いやるのである。

神無月しぐる、ころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人  
このような表現は当時他に例を見ず、相模は弁乳母の歌を聞き及んでいたことが明らかとなる。相模は妍子周辺の詠歌を一部にせよほとんど同時に知ることができる近い立場にあり、妍子周辺の女房たちの好尚や趣向もよく知悉していたと考えられる。

相模は妍子の回復への祈りを込めた歌を踏まえ、崩御してしまつた今と対比させながら弔問する。相模の贈歌は、葵上を亡くした源氏の哀傷、そして叶わなかつた妍子の回復への祈りという複雑な文脈の中で詠まれたものであった。このよ

うに考えるとき、『源氏物語』を踏まえての弔問は相模自身の『源氏物語』愛好に加え、妍子周辺の女房の好尚も同時に勘案されたことが想定される。事実、妍子周辺の女房たちは相模の贈歌から葵上への哀傷歌を読み取り、『源氏物語』のまさにその場面を踏まえて返歌してきたのであった。

#### 四、十一世紀前半の哀傷歌と妍子周辺

このような妍子への哀傷歌が踏まえるのは、『源氏物語』の中でも紫上・葵上などとりわけ重要で、その死にあたってはかなりの筆を費やして哀惜の情が描かれる女君たちであった。妍子女房たちはこのような哀惜の情を歌に取りこむ。それは、和歌一首では表現しがたい心情を『源氏物語』の哀傷と二重写しにすることで表出すると同時に、妍子を紫上や葵上になぞらえる行為でもあった。

当時、哀傷歌での源氏撰取が一般的であったと言っても、このような方法は存外に少ない。たとえば、彰子は一条帝を偲んで赤染衛門と次の贈答を残す。

女院に啓すべきことありて参りたりしに、一条院御ことおほせられ出て、匡衡が御文つかうまつりしほどのこと、もおほせられて、いみじく泣かせ給しかば、悲しくおぼえてまかで、つとめ参らせし

つねよりもまた濡れそひし袂かな昔をかけて落ちし涙に

御返し

うつ、とも思ひわかれて過る世に見し世の夢を何かた  
りけん（赤染衛門集）I・325～326

これは、『伊勢物語』第六十九段の、

君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝て  
かさめてか

を引くとともに、下の句を、『源氏物語』において明石入道  
がかつて明石君出生時に見た夢を伝える際の歌によつて

ひかり出でん暁ちかくなりにけり今ぞ見し世の夢がた  
りする（若菜上・④・115）

源氏撰取による哀傷歌ではあるものの、その利用はあくまで  
表現上に留まり、その表現がもつ作中人物の心情や場面の文  
脈には立ち入つていかない。

次もやはり一条帝を哀悼し、道長と行成が交わした贈答で  
ある。

正月十五日、一条院の御念物に、殿ばらみな参らせたま  
へり。月のいみじう澄み昇りてめでたきに、事果てて出  
でさせたまふとて、殿の御前、

君まさぬ宿には月ぞひとりすむ古き宮人立ちもと  
まらで

とのたまはずれば、侍従中納言、

去年の今日今宵の月を見しをりにかからむものと思  
ひかけきや

（『栄花物語』巻第十 ひかげのかづら・①・501～502）

この道長歌には、夕霧が亡き柏木を哀惜する次の歌が踏まえ  
られていよう。

いとどうちあばれて、未申の方の崩れたるを見入るれば、  
はるばるとおろしこめて、人影も見えず、月のみ遣水の  
面をあらはにすみましたるに、大納言ここにて遊びなど  
したまうしをりをりを、思ひ出でたまふ。

見し人のかけすみはてぬ池水にひとり宿もる秋の  
夜の月

と独りごちつつ、殿におはしても、月を見つつ、心は空  
にあくがれたまへり。（夕霧・④・452～453）

夕霧は落葉宮の本邸を見て、かつて柏木がここで管弦の遊び  
などをしていた折々を回想する。そして、いまは月ばかりが  
柏木がいなくなつてしまった邸を守っていると詠む。道長歌  
も、やはり一条帝が崩御して月（彰子）ばかりが一条院にす  
むのだという。先程の例よりはかなり『源氏物語』の文脈を  
踏まえた歌ではある。しかし、密通の果てに命を落とした柏  
木に一条帝がなすらえられるはずもなく、柏木の生前には顧  
みられなかつた落葉宮に彰子を重ねるのも不適当である。道  
長歌は『源氏物語』の哀傷の文脈を歌に落としこみはするも  
の、故人を作中人物に重ね合わせようとするところには  
至つていない。

十一世紀前半の哀傷歌における源氏撰取は、おおよそがこ  
のようなものであった。すなわち、『源氏物語』作中歌から

文脈は無視して表現だけをとるか、『源氏物語』の文脈を踏まえて歌を詠むものの、故人を作中人物に重ねることによる意味づけをしようとしなないか、である。さらに、それはその場かぎりの一回性のもので、贈答であったにしても贈歌答歌ともに源氏撰取をしようという意識は見出しがたい。換言すれば、詠者個人の思いつきや好尚に帰せられるものであった。

このように見てくると、妍子への哀傷歌でとられた『源氏物語』の女君になずらえて哀惜する方法、しかも一回性のものでなく、妍子周辺で以前の文脈を受けながら繰り返されていく源氏撰取は、実は特殊なものであったと言えよう。一人が源氏撰取をすると、それを理解して『源氏物語』をさらに踏まえていく。そのような営為が可能であり、また好んだ女房集団であった。

このような方法のひとつの到達点は、やがて新古今時代、美福門院加賀の死をめぐる俊成と式子内親王のやりとり昇華してゆく。建久四（一九三）年二月十三日に俊成は妻である美福門院加賀を亡くし、六月末、昔を想起させる夕暮れの空にひかれて哀傷の歌々を詠む。それが式子内親王の耳に入り、彼女は俊成歌に応える形で詠歌した。寺本直彦氏は、このやり取りに『源氏物語』が深い影響を与えていることを指摘した。

俊成はわが悲しみを歌うとき、源氏物語における、愛する人を喪った桐壺帝や光源氏の悲愁が、深い同感を以つ

て想起され、その歌はおのずからこれを踏まえた。式子内親王もまたこれに和して、桐壺帝、頭中将、さては紫の上の追憶に生きる傷心の光源氏の心境をしのびつつ悼歌を贈り、俊成さらに同じ場面を踏んでこれに応えた。かくてこの歌壇の老巨匠と高貴の才媛との織りなした一連の哀歌は、いわば源氏物語を伴奏として、あわれに美しくかなでられてゆくのである。<sup>14)</sup>

このようなやりとりの中で、式子内親王歌では先に見てきた「わかれの庭」という歌ことばが用いられる。

身にしみて音にきくだに露けきはわかれの庭をはらふ  
秋風 （『長秋草』・192）

式子内親王にとつて、このことばは紫上を亡くした源氏の悲痛を象徴する表現であった。この感覚をはやくから備えていたのが、妍子周辺の女房たちであったということになる。

また、同年七月、定家が俊成邸を訪れた際の歌も残る。  
秋野分せし日、五条へまかりて帰るとて

玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人恋ふる宿の秋風  
返し 入道殿

秋になり風の涼しくかはるにも涙の露ぞ篠に散りける  
（『拾遺愚草』2773・2774）

この日の天候を定家が詞書に「野分」と記したことについて、久保田淳氏は『源氏物語』からの影響を想定される。

建久四年七月九日、秋風が荒く吹き、雨が降り注いだこ

とは事実であったのであろう。その秋風を「のわき」と捉え、野分の見舞いを兼ねて、ここの所暫く訪れていない父の五条邸を訪れようと思いい立った時、定家は耽読した『源氏物語』の桐壺・野分・御法などの巻々の場面場面面を思い浮べなかつたであらうか。

俊成・式子内親王・定家の歌々は、彼ら自身が物語世界に深く入り込んでいき、登場人物たちと溶け合つて、その悲傷をわが物とすることで詠まれたものであつた。両氏が「その歌はおのずからこれを踏まえた」、『源氏物語』を「思い浮べなかつたであらうか」と指摘されるように、彼らはそれを自然に行うことのできる熱心な読者であり、源氏取りにも習熟していた。哀傷におけるこのような『源氏物語』の利用に連なるのが、妍子周辺女房たちの源氏撰取であつた。

#### 五、おわりに

以上、妍子への哀傷歌を通して、妍子周辺の女房たちの源氏撰取の様相を考察してきた。『源氏物語』は妍子だけでなく、その女房たちの間でもおおいにもはやされ、愛読されたであらうことが垣間見えてくる。その耽溺によつて、女房たちは個人としてだけでなく集団として、贈答や唱和において『源氏物語』を踏まえて詠歌していった。

しかし、妍子の崩御は万寿四（一〇二七）年である。妍子が道長から『源氏物語』を与えられた寛弘五（一〇〇八）年

からはすでに約二十年という長い時間が経過している。この二十年間、妍子周辺の女房たちは『源氏物語』を愛好しつづけたのであろうか。『源氏物語』をめぐる同時代の他の事象も考え併せる必要があるため一言には言えないが、熱が冷めて相当の年数が経過したならば、『源氏物語』の細かい表現などは記憶から抜け落ち、唱和の場で撰取することも、贈歌の源氏撰取を理解することも困難であると思われる。おそらくは、少なくとも妍子周辺ではゆるやかにせよ『源氏物語』が好まれ読まれつづけたのであり、主人の崩御にあつて『源氏物語』を踏まえ、主人を紫上や墓上に重ね合わせることで一種の合意として女房たちに理解されていたと考えられるのである。

#### 注

- (1) 渡瀬茂「『源氏物語』の考察(一)——死をめぐる叙述について——」(『源氏物語新攷 思想・時間・機構』和泉書院 平成28年/初出・『研究と資料』第一輯 昭和54年4月)によると、『源氏物語』正編は八十三人の死を扱い、それに伴う哀傷歌は一一四首にのぼる。
- (2) 『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館 平成6年)
- (3) 尾高直子「和泉式部統集「日次歌群」の表現——歌語「みどりの紙」「風の音」から——」(『和歌文学研究』第89号 平成16年12月)

- (4) 『新編日本古典文学全集 松浦宮物語 無名草子』（小学館 平成11年）
- (5) 加藤静子『『栄花物語』の表現性——死の叙述をめぐって、和漢の地平——』（『和漢比較文学叢書 第十二巻 源氏物語と漢文学』汲古書院 平成5年）
- (6) ただし、『金葉和歌集』初度本には能宣歌として次の歌が載る。七夕に、前栽あるところにて、殿上の人人多く集まりて歌詠みけるに、露といふ文字を取りて詠める 大中臣能宣  
いとどしく思ひけぬべし七夕のわかれの庭における白露  
（『金葉和歌集』秋・243）
- しかし、第四句「わかれの庭に」は『能宣集』によると「わかれの袖に」となっており、『新古今和歌集』もこちらを採る。また、同時代のものとしては以下の例があるが、先後関係は不明。  
山階寺の涅槃会に詣でて詠み侍ける 光源法師  
いにしへのわかれの庭にあへりとも今日の涙ぞ涙ならまし  
（『後拾遺和歌集』釈教・1179）
- 光源法師については、加藤氏前掲論文（5）に言及がある。
- (7) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館 平成6～10年）
- (8) この歌は『栄花物語』では五節の君の二首目となっているが、全員が一首ずつ詠んでいくこの場で彼女だけ二首詠むのは不自然である。ここはおそらく詠者が脱落しており、本来の詠者は『後拾遺和歌集』が伝える命婦乳母と考えてよからう。
- (9) 月が雲隠れるという表現には、須磨巻全体を通した漢詩や仏典の引用を想定する説があり、首肯される。しかし、その一環としての当該場面においては、月が雲隠れるという表現が桐壺院の死の比喩になっており、このような発想は『源氏物語』に独特の

- ものであった。新聞一美「須磨の光源氏と漢詩文——浮雲、日月を蔽ふ——」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院 平成15年／初出・『甲南大学紀要』文学編76 平成2年3月）、中野方子「雲隠せども光消なくに——『古今集』における日月を隠す喩と仏伝・涅槃経」（『立正大学国語国文』47号 平成21年3月）
- (10) 『伊勢物語』源氏物語の歌は以下の通り。『伊勢物語』は「色好みなりける女」に、「源氏物語」は人妻となって出仕した玉鬘に冷泉帝が詠む歌である。
- なごてかくあふこかたみにけむ水もらさじとむすびしもの  
を  
（『伊勢物語』第二十八段）
- なごてかくはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ  
（『源氏物語』真木柱巻）
- (11) 加藤静子『『栄花物語』——源氏物語の影』（国文学 解釈と鑑賞」第54巻3号 平成元年3月）
- (12) 『新編私家集大成 CD-ROM』（エムワイ企画 平成20年）、以下も私家集の引用はこれによる。なお、私に漢字をあて、濁点などを附して校訂した。一部、用字を変更したところがある。
- (13) 『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館 平成6年）
- (14) 寺本直彦「俊成の源氏物語受容（一）」（『源氏物語受容史論考 正編』風間書房 昭和45年）
- (15) 久保田淳「源氏物語」と藤原定家、親忠女及びその周辺」（『藤原定家とその時代』岩波書店 平成6年）

〈付記〉本稿は、第二回EASJ日本会議（於・神戸大学）にお

ける「The reception of "The Tale of Genji" regarding laments for empress consort Kenshi」と題した発表を基にしたものである。席上でご教示いただきました先生方にお礼申し上げます。なお、本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費／課題番号15100615）の成果の一部である。

（かわらい・ゆうこ） 日本学術振興会特別研究員